



玉の印美

六

4 曾 5
34
7



門 曾 5
辨 34
卷 7

五ノ川中ノ巻

かゝる何れぞ

おのがちふかゝるあのはあつむ危とよきりり色ハハハ人

はせむいん色ねおのとこまよみま色かゝる何れぞいん

いへふおの色こまきまきま葉葉はちふと色ねお色かゝ

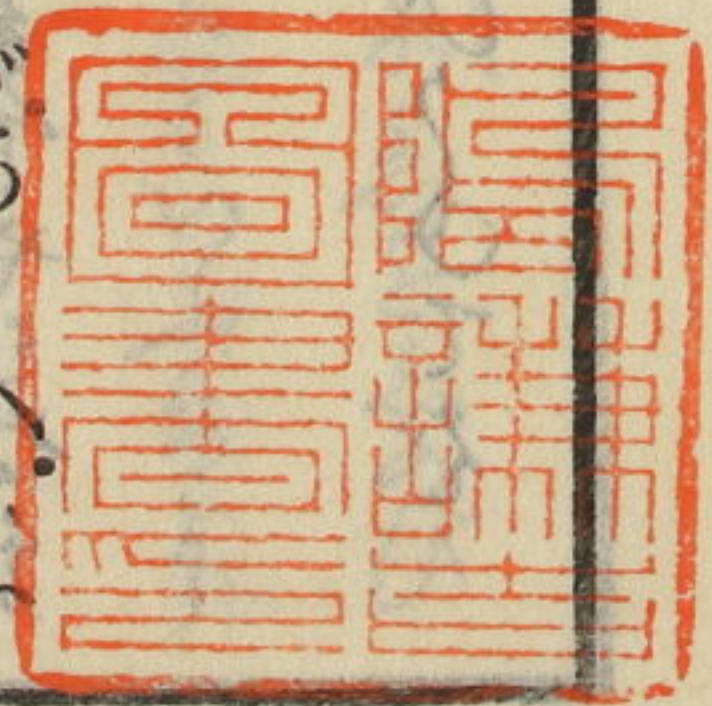
何れもよきりり色こまきまおといやま此相ゆや呉乃

よと後りやまできまよふて呉の藍といやまつと老と

名ねん成そハ韓^{カラ}およりけへつるなふ又韓^{カラ}藍^{アキ}もつる

とつる説のどし但かゝるいやまおのふおのなべて

の名ねん成そハ呉^{シレナ}およりけへつるなふ又呉^{シレナ}藍^{アキ}もつる



一がきのそわもつらげおなりと物くにんたぐまはうそぞよま
ておをかきいふおはる海を志せむとておはらばあま
かどちどふそまかまほりりれまはるおはるそまの
まりひをえまむとのこしはらおはるそまよみられ
たれがよふおはる何ぢきおまはるおはるかきうりて諸
島文あびとるりてよみぢてはくはるおはるおはる
ぢよむ人もさるみぢかいらかきおまはるかきよ
ぢておはるひりよみえおぢてはらこよみぢてはら
そらんふそまおはるきやうなはらばらおはら
んたぐまはらひもまはらおはるか

よかきよ

ようぢよりもよひようかやうにはらぢてはらよみか
らんたぐまはる人もさるみぢかいらかきおまはるか
まらてはらひりてはらひりてはらひりてはらひりて
おはるおはるおはる何ぢきおまはるおはるかき
いとほおはるてはらおはるおはるおはるおはる
くひもおはるおはる人のこまもおはるおはるおはる
らおはるかきおはるおはるおはるおはるおはるおはる
おはるかきおはるおはるおはるおはるおはるおはる
おはるかきおはるおはるおはるおはるおはるおはる

とらみしるやしくおし。

業お経信は月や何なるおあはら

月やあはぬ喜やむしは喜おぬ永身むし何ちりやの
身にしそげあふむぐふ解^{トキ}れれどもいづもそむくぐし
くして一首の飯^{ヒトウラヌ}ちりばぶふよりて今おのがあひえしる飯を
いんあはが二つやりのやをてかきかきし月も喜も喜身
ふうつがよししそはさる月やハ喜は月お何ぬ月も
むしはまし喜やハ喜は喜お何ぬ喜も喜もむしの中は喜
おりおあふむぐ永身むし何のこハ本は喜のまは身なり
むしはやふも何ぬこよこよあし喜とハあ人よをさん

もりしほがし本は身といふもその時の中は身といふこある
まて身おしてとりやう身おがしちまかしくちりる取
苦のやうゆり何ぬこよこいふ身おぬくもおしおして
りる語のいきやし上り月も喜もむしはましおあといふと
お思^{オモ}しおのづうぬくもさるハあむこけ人のあはるあ
こそ何しむむしハかか味をいなるたるべしいせお後のまは
何し立て足おてんかきこらふおあくも何しむし
けふくめさるおあしりしちりかのし喜あぬとい月喜は
ぬりハ何しむむし日ごとちは喜はにぬし新古々集雜上
お信系信書父のむしし喜ハ喜は喜おがし永身むし何の

何れにせよ其の如くよめる事ハ此業の始は其の儀に依りてしるが
 おとくことおとくよくすしる地まや。

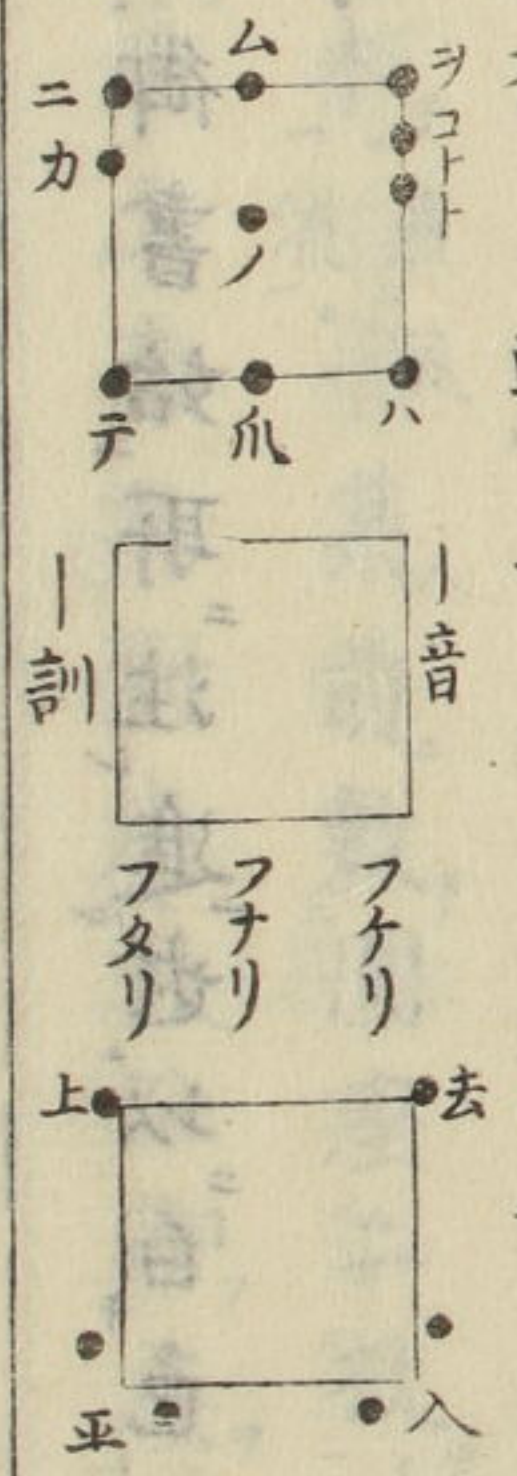
菅家系集

菅家系集系上下二巻のついでにその上の巻ハいふがまきことお
 まげ下はまハあまの字はまの上まをとかまねておまきハ何ド
 く菅家系上はたのへはへるなるんま詩のまをなん上の巻ハ
 こよなくしてあふあまのまはまままといふまをむげおま
 ねくしてま七言四句にそのへまのまをまをまもつるま
 おまおまままやまおまおまおまおまおまおまおまおま
 ままままままままままままままままままままままま
 ままままままままままままままままままままままま

何れにせよ其の如くよめる事ハ此業の始は其の儀に依りてしるが
 おとくことおとくよくすしる地まや。

菅家系集

菅家系集系上下二巻のついでにその上の巻ハいふがまきことお
 まげ下はまハあまの字はまの上まをとかまねておまきハ何ド
 く菅家系上はたのへはへるなるんま詩のまをなん上の巻ハ
 こよなくしてあふあまのまはまままといふまをむげおま
 ねくしてま七言四句にそのへまのまをまをまもつるま
 おまおまままやまおまおまおまおまおまおまおまおま
 ままままままままままままままままままままままま
 ままままままままままままままままままままままま



件，三点圖正家朝臣御書始取注進也。以白色紙小
作子書付之。無表紙。

彦根寺

同記小。同三年十二月十五日。攝政殿令參詣近江
國彦根寺給云々。廿二日。太上皇令參御彦根給云
云。凡今年京中上下多以參詣此寺。予具申中納言
殿參詣也。觀音靈驗云々。

寛治五年女御入内取御裝束

同記小。同五年十月廿五日庚辰。有。三品篤子内親王
入内之夏。是後三條院第四女母。贈大后藤茂子。云
太上皇同母弟也。陽明院養為御子。

云。今夜女御御裝束。裏濃蘇芳御衣五。濃御單。
同御袴。同打衣。上着。梅花五重。上着。黃菊
五重。小打着。赤色五重。唐衣。白羅御裳也。

賀陽院寺合

同記云。同八年八月十九日。今夜大殿於賀陽院有
哥合興。是依永義例。女房與男房為讀人。秉燭之間
人々參集。東對南面。居公卿饗饌。殿上人同。東面。庇
饗諸大夫。饗在侍所云々。雖然不被着寢殿。巽角東
面。戸前立切燈臺二本。無風。其前敷圓座二枚。為丸
右。講師座。東透渡殿。西上南北對座。敷公卿座。高麗對

座人、先令相分著給、左方北大殿殿下藤大納言、
民部卿明俊右衛門督實公藤中納言基忠江中納言匡房
皇太后宮權大夫定公右方南左大臣帥大納言經東
宮大夫師忠殿上人左藏卿道良朝臣備中守政長朝
臣右大辨基綱朝臣頭中將國信朝臣右中辨宗忠
左馬頭師隆朝臣權中將顯實朝臣右馬頭兼實經東四
位藤少將有家左京權大夫俊賴左京四位權少將
能俊左京四位侍從宗信左京尾張守忠教左京藏人兵部
大輔通輔侍從家政藏人右少辨時範源少將有賢
民部大輔基兼新少將宗輔藏人玄蕃助宗佐左近將

監仲兼相分候渡殿南北欄外次東戶前立左右文
臺左銀透手中篔入白浮線綾巾打敷青地小文錦
右紫檀泔坏臺上居銀泔盃也左右立筆一雙墨一
如唐人硯臺邊立和哥書五卷打敷赤地小文錦和
哥書物卷文各五卷春夏秋冬祝各一卷琉璃軸色
男繪皆書哥情欵歌人在女房中納言君筑前君周
美麗過差無極君攝津君右男房通俊卿匡房卿顯次召講師
君攝津君正家朝臣賴綱俊賴綱朝臣衣冠各講之帥大納言為判者中宮大
基綱朝臣衣冠各講之帥大納言為判者中宮大
右網朝臣衣冠各講之帥大納言為判者中宮大
夫執紙筆每度勝負先春夏秋冬祝次第如此夜及
參半歌講之間居菓子肴物大殿陪膳左少將有宗
朝臣左府殿下地四

位_下。初獻無勸盃。第二獻皇太后宮權大夫。次移居對南面饗饌於此座。頻盃酌及曉更事了。次召管絃具者御遊帥大納言琵琶藤大納言箏充大將_笛政長朝臣拍子予宗輔共皇太后宮權大夫付呂安名尊鳥破律更衣太平樂破三臺急前池儲船樂樂人等令奏次牽出物馬三疋関白大臣帥人退出布衣或冠。鳥羽殿逐日看花歌講講。同記云嘉保三年三月一日午時許參鳥羽殿云々。兼燭之後有御遊云々。此間人且進和歌題者江中納言申時以後被出也。逐日看花常祇候殿上人十餘人只聞別召者。

皇太后宮權大夫與下官許也。于時庭櫻紛々岸柳依々歌笛之声誠入幽興御遊後召下官為講師序者院藏人縫殿助藤実光秀春日侍鳥羽院詠逐日看花應製和歌一首。臣上字皆共也。但他人只詠和歌許不書臣上字。中宮大夫為讀師。漸講和歌之處中宮大夫歌與顯季朝臣歌一字不誤相合。又女房歌三首書色之薄樣講了。欲立座處有勅被仰云。近日每日有此和歌興御製講師不可用他人。汝同可勤仕則奉仰。又復座披見御製講之處已合愚歌天氣令咲御滿座之人為奇。一者面目也以愚慮及高。

情一者恐畏也。以拙詞叶御製進退惟谷身心失度。已及深更事子人々退出與治部卿同車歸洛。下官カ
フクカゼニチリハナモヒカズモトモニツモルハルカナ依テ叶御製被書留也。御製云ハナモヒカズモツモルナレバコノモトニ
中宮内侍所御神樂時。系東記云寛仁四年十二月廿八日甲辰今夜有内侍所御神樂云々召人十六人。地下殿上人近衛司者七人。此中長在内侍二人。一人典侍博士十二人。圍司六人。女官十六人。下四人。賢所御前物十二盃。菓子御酒召酒殿用之内侍陪膳博士取御盤云々御

幣十帖。納柳折櫃奉。饗内侍二人前。衛重各二。博士之先例。四帖云々。十二人前。圍司并女官等。各衛重一。召人近衛司等。衛重各二。可然人々。祿上人取之。祿典侍一領。掌侍合二種物。白單衣傳侍二人。命婦白單重一領。女官足下各一。白單衣傳侍二人。六位白單衣一領。女官足下各一。端以所召人各一領。近衛司給也。此記云。參議經頼マの記録。名の二字の偏をりて。系東云ハ好づき。南殿の階乃櫻橘。大夫。歷代編年集成云。南殿櫻樹者。本是梅樹也。桓武天皇遷都之時。取被植也。而及兼和年中。枯失。仍仁明天皇被改植也。今度燒亡。燒失畢。造内裏之時。取被

移^カ李部王重明家櫻樹也。件樹本吉野山櫻トイリ云々。但
拾遺公忠朝臣哥詞延喜御時見^テ南殿花トイリ云々。然者
天德以前櫻樹欵梅櫻事時可^レ決^ス之。橘樹者本自取^リ
生託也。遷都以前此地橘大夫家之跡也トイリ。南殿
樹事番記録云村上御宇天德三年十二月七日南
殿坤角新移栽橘樹一本高一丈二尺。件樹彈正尹親王
東三條家樹也。依勅定奉之。右近將監已下掘之。或
記云遷都之時彼樹在取稱橘大夫者家後園也。件
後園有橘即南殿前以賞翫其後回祿之後被栽彼
東三條樹トイリ云々。小一條。元大臣記云橘本主秦保國

也。云々。今度燒亡とあるハ天德三年の燒亡のこと
大槐秘抄云南殿の橘の本も此京小いすど内裏もあつと
ゆいづらるるに人乃家此のきるが本少しゆいづらるるれど
あつとゆいづらるる殿上人も南殿のおやゆりおて枝あがもあ
むらひるがすしりりともゆいづらるるハすともおやゆいづらるる本も
一定のゆいづらるるしすかひりゆいづらるる同書にいづらるる今
の上を述ぶ封戸もさうとゆいづらるる。なつとゆいづらるるハいづらるる。さうハおや
きうづらるるゆいづらるる近代の上を述ぶおやゆいづらるるゆいづらるる封戸の
なつとゆいづらるるゆいづらるるとゆいづらるる。ちりり及ゆいづらるる
あつとゆいづらるる。又いづらるる近代もゆいづらるる。こもゆいづらるるゆいづらるるハゆいづらるる

おとまかたをていひてかめつるめをがしとをたごた
てちかひも及びをまてしひくはねふちかしくらんと
してあまぬしをねる難を二人をかりづてとる。

蘇我馬子が車

愚史抄云。崇峻天皇は馬ふ大にふろろされあひて大にふを
こしはとがをりおろねりよにたまきまを^テてやう
あていふふちも昔は人もやをさうてあべし。今は人
も又あまぬしにたてし日本あうい。當時は王をあらし。まわ
きうるし。大にたうて。又あまぬしと定めしむたなり。
あまぬし王と安康をまをかりし。その安康を七歳まむ

まごはまぬしは王子にあつたれぬひより。ハやがてはゆに乃王
子もその時殺さるふらとばいふいせんう。此崇峻のころさ
ねあやうはう。そのあまぬしはとがもたうては。らうて
あべし。ハ申あも聖徳太子あも。まをかりあて太子はあま
てはあまもねくしてやがてる子と一つんまて。あまぬしは
とよふんねてあまぬし。此のあまぬし業をまふ。かせんハ佛
法うて。皇法をまのし。さうぞ。佛法をうてハ。佛法をうて
るうへら。王法をえあまぬしにぞ。いあて。うと。波あまぬし
まうと。又物のまをねう。ハ。ま。ね。ま。は。あ。ま。ぬ。し。は。つ。ま。り。
ま。ぬ。し。は。つ。ま。り。い。あ。ま。ぬ。し。は。つ。ま。り。い。あ。ま。ぬ。し。は。つ。ま。り。

おてはるし^して佛法お歸し^しる大君はよ申おてける子大君ハ
 作らるし^してつら^い此大君はよ申^すと徳もあ^らずま^をば^らん^とも
 欽明の佛子といふをかりおて位りつうせ給ひし^らる^る國王の^はた^は
 を殺^すむと^もき^をせ^あふ^時子^は大^君佛^法を^信じ^しる^力お^てか^て
 國王を^さら^られ^ぬま^じり^しら^しる^して^はつ^らい^{なる}つ^らい^{なる}作^ささ^る
 え^り推^古の^はま^しに^りや^まだ^にま^じり^まん^とも^やで^その^種の^お
 ま^まし^るし^るとい^わる^りの^まは^らい^しる^此佛^を何^まが^らふ^佛法^を
 い^みし^きお^りし^てむ^とし^てか^くふ^まま^の言^はい^みし^きま^がこ
 ち^{なる}を^さら^られ^ぬま^じり^しる^力お^てか^ての^まま^しる^して^は
 一條^天を^から^ませ^給ひ^て後^はお^りま^じり^まん^とも^やで^その^種の^お
 國王^の物^のま^まし^るし^る

一條^流を^せま^せ給^ひし^る後^は佛^堂殿^佛を^物の^まま^しる^しる^力
 佛^を箱^のま^まし^るし^る後^は佛^堂殿^佛を^物の^まま^しる^しる^力
 お^まを^かせ^おま^しる^しる^力の^まま^しる^しる^力の^まま^しる^しる^力
 精^暗とい^わる^りま^まし^るし^る力^のま^まし^るし^る力^のま^まし^るし^る力^の
 や^がて^まま^しる^しる^力の^まま^しる^しる^力の^まま^しる^しる^力の^まま^しる^しる^力
 大^池ふ^らの^まま^しる^しる^力の^まま^しる^しる^力の^まま^しる^しる^力の^まま^しる^しる^力
 延^久の^佛を^おり^まじ^りま^んと^もや^でそ^の種^のお^てか^ての^まま^しる^しる^力
 延^久の^記録^所を^さら^られ^ぬま^じり^しる^力の^まま^しる^しる^力の^まま^しる^しる^力
 乃^宣旨^官給^付を^たら^しる^力の^まま^しる^しる^力の^まま^しる^しる^力の^まま^しる^しる^力
 たり^しる^力の^まま^しる^しる^力の^まま^しる^しる^力の^まま^しる^しる^力の^まま^しる^しる^力
 たり^しる^力の^まま^しる^しる^力の^まま^しる^しる^力の^まま^しる^しる^力の^まま^しる^しる^力

とてつひて悩つきと成りぬる。引とつけに本は入ふことな
り。ふりてよりとて入しぬかきつりかまるとは平治の源義朝の
首獄門よりかきつりてついでに北よき。ふりてついでに北よ
下野。うきつりては兼及し本は入ふ。ふりてついでに北よ
まかるとは獄の門のりやわら。ついでに本は入ふ。けつりてはふ
たり。此れもはど書ふのせきと。本は入ふ。ついでに北よ
後系極のそけへ
後系極、折改ら。はのみ。後、ま、ま、おてごと。しむを。ほど。是後
抄。後の系極。と。の。字。派。ま。へ。かきつり。の。本。は。入。ふ。
縣居大人の傳

ついでに大人と。答、縣主氏りて。孝祖ハ神魂神の孫鴨武
津之身命。ハ八咫鳥と化て。神武天を以て導きたり。給ひし。神
た。と。姓。氏。孫。り。入。し。や。が。お。と。此。神。は。末。山。城。山。相。樂。郡
岡田。答、大神を以て。師朝といひし。人。文永十一年。ふ。遠
海。五。敷。智。那。濱。松。を。岡。田。と。な。す。答、殿。の。新。ま。を。い。つ。ま。つ。べ。き
よ。し。詔。を。蒙。り。て。彼。々。を。賜。つ。ま。を。お。ら。彼。新。宮。神。主。り
た。と。し。け。し。り。馬。ま。ふ。る。し。又。繪。旨。は。ぬ。く。ぬ。る。相。あり。又。乾。元。元
年。お。し。詔。を。か。り。か。り。て。う。は。是。の。地。を。領。ぎ。ら。れ。て。し。し。繪
上。旨。を。て。あ。ふ。傳。を。わ。り。か。り。て。ま。か。の。神。主。り。し。は。大人。乃
五世の祖。政定といひし。引る系のは軍功有て。東照神御祖

君より奉玉行がうらちと刀と丸鏡の具足とを賜りけぬ。此の
 一何記のもてよりとて大人を元禄十年ふは品給りて生
 こ給りて。ついで。ほぢよると。たまにゆへんをよせて。享
 保十八年ふ京よりのがりて。稻荷に宿。宿所東麻呂大人の教
 こそをまひ。寛延三年ふ江戸に居りて。す後田安殿より仕
 事。了給るの殿より。葵の文乃御衣を賜をよめ了。此の方。何れ
 して。あやの由衣と氏人のびりあ。と。林やちりきん
 和六年十月晦の日。三十七とて。みまかり給ひぬ。武蔵玉在
 郡品川の東海寺中。少林院の山ふ葬。こも大人のお子^{ツレハコ}が
 お葉がと。より。よ。ま。お。より。て。と。せ。り。た。ち。父。ぬ。り。母。ら。ど。が。

きと。と。き。ん。べ。ま。り。あ。ら。ふ。り。れ。き。ん。又。よ。き。り。ゆ。き。き。ん。り
 ろ。ひ。き。り。て。と。き。き。ん。を。べ。く。ら。ん。
 花のうごえ
 花をゆくり。桜は山桜の美。けりてり。ふ。き。き。ん。ま。づ。ふ。ま。づ。を
 て。花。と。き。ん。ま。づ。は。又。も。づ。あ。べ。き。物。も。な。く。う。れ。き。れ。の。も。も。と
 を。れ。を。葉。も。と。て。花。の。ま。づ。う。ね。ら。は。こ。よ。け。く。あ。ら。う。ら。め。大。人。の
 ぶ。ら。う。と。い。や。中。ふ。も。ま。ま。づ。り。有。て。こ。ま。ふ。え。と。バ。一。本。ご。も。ふ。つ。き
 さ。う。か。ま。ゆ。き。そ。ら。有。て。ま。づ。う。一。日。と。き。ハ。お。き。や。う。し。又。今。の。昔。小。相。が
 や。つ。ハ。ま。ま。さ。わ。や。つ。ら。も。や。う。か。う。て。い。い。と。も。づ。く。り。ら。り。れ
 最。日。は。え。ふ。え。け。け。し。る。い。き。は。き。も。た。つ。や。ち。や。ら。づ。ば。松。も。何。も。け。き。や

くるささるにさしほくふ鳴るいもをえそこもふ又也。えきさう
 されたる日。日親のまきをかさうんさるいあひいしよおしてあま
 じりたもあがなまでらんし。終日いささし夕むをえも梅もあ梅。
 ちりきさしーかなほげささいとせげさたささかりおねさまおやう
 やうちききゆきし。えぞいほきかたさうそいこちさうーりれさう
 らの鳴るさちまでもちさうさうでひげふちいさう。祢むささ
 がみさうのさうさうはえさばさふ有てよあ申い。行すもみさか
 くこそし。さるまきさふさひさうはうー。白きいささうさうさ
 ちとさるささあふさうさう。大さ梅のむ。ちいさな枝を。おさう
 さうさ。ちりくさささぞ。梅をさうさうさ。れる。桃の花を。おさう

鳴ほりきささるにさしほくふ鳴るいもをえそこもふ又也。えきさう
 かまひがささるにさしほくふ鳴るいもをえそこもふ又也。えきさう
 ー。兼もよんかささるにさしほくふ鳴るいもをえそこもふ又也。えきさう
 くさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 後。せのりさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 らせれてさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 があふさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 ふうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 やささるさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 きさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

あつたなきハ心のちりふやたけりかきびおやう。ふれど
そとをふむむとやうなるむらうゆふやうむむ。

神明鏡

神明鏡として。神武天皇より。後花園天皇の元代まで。は
どとをこころし。上下ニまれのゆゑなり。そとふ。神功皇后。戒
定慧箱を。摩白濱小埋み。松の枝を折。逆ふ其上。小立ゆふ。注。そと
依之箱崎と云。皇后誼曰。箱崎の千代の松系石。思。且久津。礼
牟世まで。君ハ座ませ云。或々皇后を。安曇。磯童奉。思懸。り依
由。圃召て。皇后伊弉小云。衣ふふ。二も。ち。バ。赤裸山。小。一。を懸。り
ま。り。物を云。或云。箱崎。松。上。白幡。四流。赤幡。四流。降。下。長

八丈也。故号八幡。桓武天皇此。涉時。又万葉集。哥撰と
ら。内舍人濱成。兼て。三千餘首奉。撰加。する。高丘。親
王も。春宮を取。うと。せ。給て。弘法の。弟。子。と。成。り。真如親王也
申。伊弉。云。云。ゆ。々。奈落の底。り。落。ぬ。と。バ。利。利。も。戎。駄。も
か。う。う。づ。り。ら。と。大。師。嘆。給。て。返。哥。云。か。く。バ。り。達。磨。を。と。り。と
忍。人。を。ま。き。バ。多。駄。迦。多。ま。で。も。成。の。が。り。ら。と。 兼和六年。小野。篁
隱岐。國。へ。被。流。り。り。同。七。年。沙。汰。有。て。一。仰。三。仰。不。来。人。待
書。暗。雨。降。恋。乍。寝。と。云。遣。し。き。と。月。夜。り。ハ。来。ぬ。人。ま。う。ら
う。に。曇。雨。ふ。ふ。ぬ。く。バ。ら。び。つ。と。祈。ん。と。讀。と。う。れ。を。難。有。讀
し。や。り。と。て。伊。弉。赦。免。り。り。 大。く。と。か。う。や。う。け。み。ら。と。お。く。と。と。と

をさうしし書し。傍のぼししはさうさうさうさうさう。又二位、
尼乃安徳天皇御抱、なまの海よりさうさうとせしれり。時乃
あささうのさう。今ぞさうの裳濯川の流れて信の底ふもさ
こりりとい。

笛の孔

悉曇藏云、元造曆云、伶倫造笛、文。此乃取嶰谷竹、學
鳳凰鳴者也。笛有十一孔也。二孔闕而不傳。其九孔
者、以出五音。竹節為尾、竹抄為首、本管之口、呼之為
口。從此而起。於竹腹上、一、二、三、四、五、六、七、孔。如行、呼
為次、干、五、上、夕、中、六、下、口、六、二、孔為宮。此有二條。謂

一越條 律 差陀條 呂 土也。口、六、二、孔者。是一音之大
小。合為一越條。次、孔、非別條也。名為无條。是則諸音、
塩梅故也。干、孔為商。即是秋音。此有三條。謂平條、律
大食條、乞食條、呂。金也。五、孔亦非別條。塩梅之義。同。
次、孔故也。上、孔為角。即是春音。名為霜條、律。其呂音
未傳之。木也。夕、孔為徵。即是夏音也。此有二條。謂黃
鍾條、律。垂條、呂。火也。中、孔為羽。即是冬音。名盤食條、
律。其呂音未傳之。水也。中、孔、六、孔。以此二孔。合名、下
也。竹節、下、孔。所以吹之者也。抄

寶だろーといふゆゑ鍵あゝる

今云中ふしものつづりこそ。寤はるまじりをたつをゑぐり
り。ま中ふ鍵乃つらひ何のぬふりとてをせじし。云智天皇
の治二年ふ近河玉栗を、那小盤城村主殿といひし人の妻。家
の存り出たりし。前へてりしと鑰匙二つ、うちまゝりし。を
とてまゝ殿入りし。くまそとよりその家富家えしりし。ま
書記小くしり。こととや。家もそとくふくつて。後ふも
かくとふおりふじ。

持佛堂

武天皇の治代。廿四年三月廿七日。すくものつふ。諸國每家
作佛舎。乃置佛像及經。以禮拜供養。とつり。書記し

ふらり。民乃家くまで。持佛堂といふ物をかまき佛をゆ
つらむこととや。まじりし。

天皇は、序前ふと訴ふ事

春記云。長曆四年十月廿二日。今日初遷御内大臣、
二條第云々。今夕行幸間。於東院東大路與神解小
路边。宇佐宮下部。解。来訴人也。件。愁人。被取申丈。一
人。着衣冠。進寄御輿。右方。奉音致訴訟之間。希有之
事也。為右將等。不追却。不覺者等也。予令追却了。須
搦捕也。然而行幸新所之間。左右有憚也。故不令搦
也。事尤非常也。云々。まじり。同年十二月廿五日。平野

三十年づから月日へて。あつしをいかにかきまてち
 たり。えど。又。よりさき。大まねに。教十侯のいふことより。まづ
 その是代をかき人むかりも。かきたるを。あつし。いかに
 らふ人の。かき。あつし。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。
 一。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。
 大師の。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。
 まづ。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。
 ちづ。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。
 かし。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。

神の造り始に地をうきあがも。あつし。いかに。いかに。いかに。いかに。
 へ。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。
 か。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。
 て。例の。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。

神社を宗廟社稷とすはるる

神社を。後。あつし。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。
 き。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。
 い。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。
 乃。漢文。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。
 い。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。いかに。

まてり海くの神社を廟とハナシキマドキヨハ筑前國
の香椎廟カミヒの古書カミヒと云ふなりて廟とハナシて云々社名
怪しういふはあつたべしと云ふまてハ豊前國の大
寺姫廟神社なりと云ふはあつたべしハ古事記傳三十卷小
のり考へてハ云々ゆゑと云ふことハ云々ハ神社と宗
廟と社稷とトナシハ皇國の古の法定めと云ふことハ云々ハ
ごふと云ふことハ云々ハ神社の是成と云ふことハ云々ハ
くのと云ふことハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ
の社をあのが佛なりと云ふハ引込むことハ云々ハ云々ハ
を云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ

人を仁と云ふ事
人を仁と云ふ事近き世は俗サトヒゴトのやうな事と云ふ文粹の大江匡
衡乃文云臣諤當其仁聊記盛事と云ふ事なり

東京西京

平安城ハ東西の京を云ふことハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ
東京の事云えて西京と云ふ事云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ
記云予二十年来歴見東西二京西京人家漸稀
殆ナカ幾幽墟矣人者有去無来屋者有壊無造と云ふ事
しうは女侍の位階
延喜天曆がたは云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ云々ハ

ていふ人の妃夫人あやめのつらふりていせきかりしつら
をせてハ形か位階とむきくぞ有きん小野宮をたはれ女の
女湯は天曆元年ふかき給つり。四十九日の教文小女御贈
従四位上藤原朝臣とぞ有し。とやうも文粹小つり。
八木
八木八木といふやゆききとし小右記の寛仁系壽のつら
乃そつり。八木十石八木石ねがそつり。

客殿 小宮

吉部秘訓抄小文治二正十同記云大夫史廣房入
来先立中門外予出客殿とつり。客殿といふとそは

つらもつり。いほし書り。建久四十一五同記云
今日仁和寺小宮コミヤ高倉院御灌頂後朝也云とつら
い書りといふと元服をぬ人を小君といふ。こふ小宮
といふハ皇子は喜ふまけを中はあべい。

平戸記延應二年二月十一日のつらふ。臨夜景密
密参祇園依恒例之勤率人数有百度詣事云とそは
まふ掛替といふあり。こはうは弦よりわらわらう。又ハ
車は牛とつらふ。同記小殿下北政所令参春日社
給予依召引献懸替牛一頭とつり。同記仁治三年

の取小大和太政大臣... 明月記... 寛元三
年三月廿八日花供の佛事... 此間誦今度
新花讚此讚三度許念佛相交誦之其後誦新五偈
漢讚次誦其和讚是皆予制作之也... 同記同
年四月八日今日平野祭也依神事不念誦但依例
断塩... 八日ハ茶原の縁日塩... 同記同

修明門院小強盗... 入... 一夜
不聞群盜推参

修明門院女房等皆悉遇其殃結句奉剝仙院云々
とつ... 北條泰時が政... 仙院云々
みそ云の下よ... 結句奉剝仙院云々
修明門院女房等皆悉遇其殃結句奉剝仙院云々
か... 結句奉剝仙院云々
と... 結句奉剝仙院云々
大名
白川顯廣王記の安元三年四月... 諸國大

子地いしよふよりゆかりに諸侯ふ五等は爵とて公侯伯
子男と五まふみ乃ちあるにそとをる玉造君別をどの
色とつりいふゆかりにまふ中の一のめとつりてま
べし諸侯といひしよ又まふと國造といひしよ似
しよゆかりにまふのゆかりにまふゆかりにまふは諸侯
乃ちゆかりのゆかりにまふとまふは漢皇國乃ちいふ
のまふまふゆかりにまふとまふ人まふて玉造の中ゆかり
まふまふゆかりにまふとまふは又まふ色といひゆかりにまふの地
まふゆかりにまふてゆかりにまふゆかりにまふ

筑紫君石井が事

ひうつりゆかりに筑紫君石井といふ玉造ゆかりに君と
ゆかり上のゆかりに玉造の中乃一色を君し書紀まふゆかり
ゆかり玉造とまふゆかりにまふゆかりに葛子といひしよま
筑紫君と記されしよま君まふゆかりに繼體天皇のゆかりに皇
朝ゆかりにまふゆかりに礼ゆかりにまふゆかりに討手乃ゆかりにまふゆかりにまふ
ゆかりにまふ此石井ゆかりにまふゆかりに墓ゆかりにまふゆかりにまふ
ゆかりにまふゆかりにまふゆかりにまふゆかりにまふゆかりにまふ
ゆかりにまふゆかりにまふゆかりにまふゆかりにまふゆかりにまふ
筑後ゆかりにまふゆかりにまふゆかりにまふゆかりにまふゆかりにまふ
筑紫君磐井之墓墳高七丈周六丈墓田南北各六十
丈東西各廿丈石人石盾各六十枚交陳成行周匝

四面當東北角有一別區号曰衛頭其中有一石人
從容立地号曰解部前有一人裸形伏地号曰偷人
側有石猪四頭号賊物彼處亦有石馬三匹石殿三
間石藏二間古老傳云當雄大迹天皇之世筑紫君
磐井豪強暴虐不偃皇風生平之時豫造此墓俄而
官軍動發欲襲之間知勢不勝獨自遁于豊前國上
膳縣終于南山峻嶺之曲於是官軍追尋失蹤士怒
未泄擊折石人之手打墮石馬之頭古老傳云上妻
縣多有篤疾盖由茲歟と云一より周六丈を高くふ
るれば六の上小此をといふ字は有りむがあらざる

ふべしかくてけ石井か造りかまより一墓なりかへ今この
ふものよりて現るるよりかてあられたるその國を
考へるも一かか又ふまふ風を記しるべきか
ぞるも一かかおあまもくもるるよりかか
しるたまかかまへを物とし今其のふたふた
かかふもいとよまかかかかべしこまかかへ
らみかかか道の身かかかかかかかかかか
ぶりかかかかの國を家かかかかかかかかか
かかかかかかかかかかかかかかかかかか
延喜式五十卷ふし十卷を祇式を事

延喜式式をべし五十巻ありて。ちがも十巻を神祇式と
これを新延式の下なり。ゆへに神公事オホヤケコトのうち五イツか一つを
神事とす。一はこし。神事カムツガのまつり。このまじ
まじ。盛サカリるる。ほどを。あひえ。か。を。し。り。ゆ。こ。し。ゆ。を
ど。ハ。神。を。祭。る。こ。し。つ。り。を。ふ。し。て。周。の。代。り。こ。り。と。す。い
よ。い。ま。形。を。り。ふ。あ。を。る。と。然。る。を。此。神。の。序。を。人。と。い。ふ。
い。し。き。我。玉。ゆ。り。ふ。あ。り。い。ま。い。て。よ。ろ。く。か。を。や。
た。り。り。と。ふ

る。葉。集。り。好。づ。ま。ふ。い。ふ。言。ら。る。と。あ。ふ。り。い。り。き。り。り
此。詞。を。さ。き。し。し。説。み。を。ら。る。げ。今。そ。乃。ち。ど。と。ま。ら。ぬ。縁。く

考へ合さる。或は海川をさふ。うづ。と。或は船より。後家
した。が。ふ。り。し。し。船。河。り。も。引。網。の。き。と。は。お。や。ど。り。の
ま。ど。い。ま。い。づ。も。い。く。あ。お。着。く。こ。ふ。の。も。い。ま。い。ま。い。ふ
う。う。ぬ。き。一。つ。も。お。し。し。葉。中。は。ち。を。を。ら。る。海。を。と。す。
べ。し。し。中。ふ。之。の。ま。た。ら。る。ま。ち。ふ。い。り。ゆ。く。む。年。は。月。日。の。
は。い。ど。む。う。づ。と。君。が。引。網。乃。お。づ。ま。い。と。ま。い。と。ま。い。こ。し。
ハ。上。と。下。に。も。海。川。を。と。す。り。り。海。を。も。他。の。例。を。あ。て
あ。か。し。海。路。を。つ。り。帰。り。ま。ま。お。の。人。を。さ。べ。し。又。九。の。巻
の。長。き。は。及。ふ。い。と。う。ら。う。ば。な。げ。さ。ひ。ま。い。り。ら。う。こ。れ。り
海。川。の。こ。い。る。し。が。れ。も。は。ら。い。し。し。ま。ち。あ。り。海。の。こ。い。の

とつては、川をば、ゆくとし、此が、みま、海又、川まを
おのをもよめ、れな、備あし、ゆるお此河、申言の物、修ま、ねど
かいつま、い、く、ま、美、お、し、ね、ま、ま、く、む、ま、お、い、な、り、神
樂、は、ま、り、し、お、老、神、乃、西、家、に、ま、り、れ、く、た、が、い、ま、り、河
と、つ、も、結、む、い、ふ、し、か、く、ま、で、は、う、つ、り、か、り、き、ん、し、あ
糸、り、い、つ、と、は、い、く、う、と、し、ね、く、れ、る、か、さ、た、り、し、

万葉集おて、つ、お、辞、お、義、ま、ま、大、王、と、お、家、る、り、

系、糸、之、の、ま、お、我、定、義、之、口、の、ま、お、言、義、之、鬼、尾、七、は、を、又
十二の巻、お、結、義、之、十、の、ま、お、織、義、之、ま、お、逢、義、之、十一の巻、お、
觸、義、之、鬼、尾、こ、ま、り、は、義、之、み、お、曰、お、辞、お、て、し、と、訓、を

ま、ま、と、論、あ、し、ま、ま、と、ま、ハ、義、字、を、て、の、假、ま、お、用、ひ、く、ら、お
ま、つ、く、ん、ま、お、義、之、と、つ、ま、ま、の、ま、お、て、義、之、の、ま、お、い、つ、
ま、つ、ま、つ、く、義、字、ハ、み、ま、義、を、誤、ま、り、に、て、り、ら、く、は、玉、義
之、と、い、ひ、し、人、の、名、に、此、人、書、お、名、を、ま、ま、と、お、り、わ、た、く、び、お
く、し、て、皇、國、お、て、も、た、り、り、こ、ま、が、手、跡、を、バ、結、お、ま、で、し、お、と
み、ま、お、り、手、師、の、ま、お、て、書、お、し、書、の、ま、お、手、し、い、お、ハ、古
ま、ま、お、て、日、本、紀、お、り、書、博、士、を、て、の、ま、お、せ、し、て、か、ま、ま、し、訓
ま、り、又、曰、お、万、葉、集、お、申、お、て、し、お、辞、を、ま、お、ら、手、師、と、し
ま、ま、お、て、お、べ、し、ま、ま、又、七、の、ま、お、十一、乃、ま、お、結、大、王、十、は、を、お、
定、大、王、十一、乃、ま、お、言、大、王、物、乎、と、つ、ま、こ、ま、り、は、大、王、と、て、し

と訓てこころり明らなる御ふくハかく訓べきことあり
ぞしていつくよみ誤アとらむことしらの王義裁之よしはド
く手師のまじそハ義之が子に王獻之といふも手かきあて
者く父子を大王小玉といひて大王を義之がこころ好まじ
かきばうの義之とけ大王とをお照してそとあてしと訓べ
きこと又そとハ王義之の御こととをいふべし原の流よを義
之とてしと訓を義ハ蒙の儀し又大王をいふことハハ天
子にさしといふれしとて蒙御字ハ母しとて御ふく又
義之とていふのみとて義と一字を好して書候そらり
ゆりこハ必義之と書ばまよるまよることとて又大王とい

天子はさなるバ、天子と申候可もあつべく、天皇と
いふべきふいづともいふ大王とのそくも、ハ、さしこふつと
あし、その入天子はさなるバ、字考りて、化字は訓ふ母しと
と、あつべくともあつと。

阿理とハ、

万葉十の卷ハ、安里伎奴能、安里豆能、知尔毛十六卷ハ、蟻衣之
宝之、子等好むとらむ、阿理とハ、阿、理とハ、阿、
やう、阿、をいふ、あ、をいふ、と、いふ、を、好む、と、いふ、
と、いふ、物の、阿、を、いふ、と、いふ、と、いふ、と、いふ、と、いふ、

又きバ節旗下ふ近き取ふ立ゆゑ乃名好べし。

遠きといふ色

遠きといふ色の今の子あも。昔々の着きをいへども。昔ハ黄色のうをを
いひ。又緑色をいひたりき。此より吉部秘訓抄。建久二年十二月。又
玉葉建曆二年十二月。親王元服の時。袍は色ふつきて。うを
端あり。昔色は着きをいつがわし。緑色をいふを。浅葱のきより
下。異なるを。唱へ乃日どきす。お混ひつ。又後ふ着きをいふ
を。縁をいひつ。うをたるべし。

近江の君が畑といふこと

近江の君が畑といふこと。畑村といふ有て。大公大明神といふ

社あり。惟高親王をまつ。といつり。村の民ども。かき。一年づ。秋
ま。なる。ま。が。一。さ。の。る。ゆ。ま。り。つ。て。ま。を。一。年。秋。ま。り。整。め。て。後。又
一。年。ゆ。ま。り。つ。て。ま。を。一。年。秋。ま。り。整。め。て。後。又
を。え。は。く。と。ま。び。し。を。老。し。る。の。を。バ。犬。と。い。ふ。又。此。村。の。禪。宗。は。寺。有。
て。ま。を。は。内。お。惟。高。は。親。王。の。廟。と。い。ひ。つ。塚。も。あ。り。此。村。を。伊。勢。
國。負。辨。郡。より。越。る。塚。お。近。き。所。ま。を。い。ふ。ゆ。き。置。し。と。い。ふ。此。村。人。も。
夏。ハ。茶。畑。多。く。つ。つ。り。て。お。お。乃。秋。田。へ。つ。つ。り。て。お。お。ハ。炭。を。焼。て。お。お。
お。お。乃。秋。田。へ。つ。つ。り。て。お。お。乃。秋。田。へ。つ。つ。り。て。お。お。乃。秋。田。へ。つ。つ。り。て。
お。お。乃。秋。田。へ。つ。つ。り。て。お。お。乃。秋。田。へ。つ。つ。り。て。お。お。乃。秋。田。へ。つ。つ。り。て。

お。お。乃。秋。田。へ。つ。つ。り。て。お。お。乃。秋。田。へ。つ。つ。り。て。

古く集大舟のちふり山あり。ちふり山よりちふり山と見え、
ちふり山と見え、ちふり山と見え、ちふり山と見え、
越見者笠縫之嶋傍隠棚無小船と云る。笠縫嶋と云る。笠縫嶋と云る。
越見者笠縫之嶋傍隠棚無小船と云る。笠縫嶋と云る。笠縫嶋と云る。
越見者笠縫之嶋傍隠棚無小船と云る。笠縫嶋と云る。笠縫嶋と云る。
越見者笠縫之嶋傍隠棚無小船と云る。笠縫嶋と云る。笠縫嶋と云る。
越見者笠縫之嶋傍隠棚無小船と云る。笠縫嶋と云る。笠縫嶋と云る。
越見者笠縫之嶋傍隠棚無小船と云る。笠縫嶋と云る。笠縫嶋と云る。
越見者笠縫之嶋傍隠棚無小船と云る。笠縫嶋と云る。笠縫嶋と云る。
越見者笠縫之嶋傍隠棚無小船と云る。笠縫嶋と云る。笠縫嶋と云る。
越見者笠縫之嶋傍隠棚無小船と云る。笠縫嶋と云る。笠縫嶋と云る。

柏原をてりて、古く長あ人のとありしこと、ゆゑに傳へし
難波の古の園をえりて、住吉社乃南に、細江とて、沼あり
て、そふふとて、記し、ちふり山とて、茶玄のそふ、從千沼廻、雨曾
零、東、四、八、津、之、泉、即、網、手、網、乾、有、泊、將、堪、香、聞、右、一
首、遊、覽、住、吉、濱、還、宮、之、時、道、上、守、部、王、應、詔、作、歌、を
ちふり山とて、笠縫嶋と云る。今東生郡の深江村と云る。今東生郡の深江村と云る。
今東生郡の深江村と云る。今東生郡の深江村と云る。今東生郡の深江村と云る。
今東生郡の深江村と云る。今東生郡の深江村と云る。今東生郡の深江村と云る。
今東生郡の深江村と云る。今東生郡の深江村と云る。今東生郡の深江村と云る。
今東生郡の深江村と云る。今東生郡の深江村と云る。今東生郡の深江村と云る。
今東生郡の深江村と云る。今東生郡の深江村と云る。今東生郡の深江村と云る。
今東生郡の深江村と云る。今東生郡の深江村と云る。今東生郡の深江村と云る。
今東生郡の深江村と云る。今東生郡の深江村と云る。今東生郡の深江村と云る。
今東生郡の深江村と云る。今東生郡の深江村と云る。今東生郡の深江村と云る。

延喜内 匠寮式也。伊勢齋王野宮装束の中也。御輿
 中子菅蓋一具。菅并骨料材ハ從撰津
 此系の人よりとりて。此深江村ハ大坂城より東ありて。
 是河内の場合也。此地ハ一ハ嶋あり。里人ハ傳
 へて。海にありて。此の方ハ難波堀に。東に
 大和川。南に海川。その間ハ小川を多く流し。此
 沼江にて。難波の古園の方にも。此の地
 又今ハ里人の住る所也。此村の地也。此の地
 といつても。此地も。井原の根貝の地也。此の地
 といつても。此の地也。此の地也。此の地也。

きやうのえん。此の地也。此の地也。此の地也。
 さぬまのふたの敷
 菅系大坂の讚岐守。此の地也。此の地也。此の地也。
 萬三千佛。哀愍二十八萬人。部内。此の地也。
 後波。此の地也。此の地也。此の地也。
 此の地也。此の地也。此の地也。
 大坂。此の地也。此の地也。此の地也。
 此の地也。此の地也。此の地也。

かゝハ今の事ふいふをうかすべし。

つわくら

今葉ふ小き刀ふつわくらといふ名あり。貞観儀式大嘗會用物の中は阿為刀子アキ柄といふあり。此名よりゆゑなるべし。

ほしの笛をぬく

台記より久安三年七月法皇天王寺御幸の事あり。幸ス聖靈院ニ云々。勅シ群臣ニ奏管絃ヲ勅曰シ笛資賢朝臣。笙内大臣。篳篥俊盛朝臣。但レ称ニ不堪レ吹レ之ヲ琵琶信西通憲法名法名篳篥覺邏。苗資賢朝臣。其レ實法皇親吹ス但レ資賢時ニ吹シ法皇曰ク為シ沙門ト吹ク笛ヲ可レ招ク嘲ヲ即居レ隱障子

吹キ之ヲ予猶近ク候ニ聞ク御笛音者。上下莫シ不シ歎ミ美シ御出家後今夜初ニ吹キ云々。をんとハ此レハフマデ也。ありしハ宮ハぬぬふせしハ信西覺邏琵琶ハ竹ハ絃ハわらしハももきしももりしハハ女ハももりしき。

本おもむき

赤漆出つ葉ふふよりねきハ縁ハハハあが思ひつつ本をももりししハららともりし。

ららともりし

金葉葉連ふれハももふハ和泉亦ハがハ笑ハるハままわりきハふハららともりししハららともりししてハ神をままりしともりしともりし。

を修いられむかへにこれおしる人さうせよ。

玉のしるし

室長ちうにへ修玉のしるしとておまはらまして。近き世ふらま
ゆる信をたうへるしるしとてをたうせ。うしあはれとてがらま
るる玉のしるしとてをへるしるしとて。何るも室長がさふさふ
とてがらま。後乃けあらのち文り。此書お出さるるしるしとて
たうはるしるしとてあはるしるしとて。此書用ひなまき人
ら。あまきかぎりにあはるるさきさきふんさきま。うらへしるし
ひざかすつらと。さふとあはるるしるしとて。うらへしるしとて。
おそふ改むるしるしとて。あはるるしるしとて。のりなご。おそふしるしとて。

あまきかぎりに。改むるしるしとて。あはるるしるしとて。うらへしるしとて。
おそふ改むるしるしとて。あはるるしるしとて。のりなご。おそふしるしとて。
あまきかぎりに。改むるしるしとて。あはるるしるしとて。うらへしるしとて。
おそふ改むるしるしとて。あはるるしるしとて。のりなご。おそふしるしとて。
あまきかぎりに。改むるしるしとて。あはるるしるしとて。うらへしるしとて。
おそふ改むるしるしとて。あはるるしるしとて。のりなご。おそふしるしとて。
あまきかぎりに。改むるしるしとて。あはるるしるしとて。うらへしるしとて。
おそふ改むるしるしとて。あはるるしるしとて。のりなご。おそふしるしとて。
あまきかぎりに。改むるしるしとて。あはるるしるしとて。うらへしるしとて。
おそふ改むるしるしとて。あはるるしるしとて。のりなご。おそふしるしとて。

かまぼこ

候まづしるしと。近き世ふらまして。あまきかぎりに。あまきかぎりに。
あまきかぎりに。あまきかぎりに。あまきかぎりに。あまきかぎりに。
あまきかぎりに。あまきかぎりに。あまきかぎりに。あまきかぎりに。
あまきかぎりに。あまきかぎりに。あまきかぎりに。あまきかぎりに。
あまきかぎりに。あまきかぎりに。あまきかぎりに。あまきかぎりに。
あまきかぎりに。あまきかぎりに。あまきかぎりに。あまきかぎりに。
あまきかぎりに。あまきかぎりに。あまきかぎりに。あまきかぎりに。
あまきかぎりに。あまきかぎりに。あまきかぎりに。あまきかぎりに。
あまきかぎりに。あまきかぎりに。あまきかぎりに。あまきかぎりに。
あまきかぎりに。あまきかぎりに。あまきかぎりに。あまきかぎりに。

てふをくねろのへきせいしむすねび乃力及ぬふ一何と也
あしとあやまるもほみゆるまへへねづうひは今に心澄みと
しハたむけあごとくしるえびむすふおつうぬらうをべしといよ
くそれすおなきもごねるを後ろりるけしむおむびむハへま
かへまいふぞやこそとく心ぞおとむ又おつうかおよりねびおや
おまがりてふぞいらむとまふるべしと思ひむとありておのてカ
つとざるからねむごわい何とバかつおふやとぞおあゆるとろ人お
のこがりもんまはほひりかあづしむとバとよおくてぞやみ
ぬべりもあるとまばいおえおおさ又もしおへを日おしを又あち
まつの湯者ねどつうかとしかかろくおあせし候まハまづ

ニシノコエ

そくそきそせあるさるゆきをかくひかひともおつうねてふ
ふりえむむやむへまおろくね何とぞもおのちううねつとぞて
おまじうるおろくおまじまじぞ人のみねぞ一もろくおやのて
おあつうそくそくおむむとくつうおつういあつうドヤと

おまき名ぞろきあゆめり

ゆきま社の社乃今ハ繕し又繕おれどもさうおろくねあり
ゆるなどいづくおももろるハいとかあきまをぞし神祇官は帳お
のせるねどバウけてしむさハたもまじきもねるを中ごろのそのみ
ふもふた下はよろけは事とね乃おまてし皆みぞしおみぞ
ししおえしせおしおえしせおろくおあつうけしとくおあつうねハ

乱と云は志をば形りなきを今のは言ふ。以て人ふもすれなる
までとて治まつていともをせでう。天の下業ふさうやうよ。
ようがふたばよづて。地もさうか。かろうへうを垂て始
ふは言ふ。一は神の社もハ。神ふたふまうりて。業ゆべき時
形りなき。然あふはは。神もハ。跡をふふとふ。あづのみま
ふ。又今もを。ながく。さぶら。形り。疑も。きを。バ。よ。考へ
る。て。ふ。ふ。ふ。ふ。定。を。う。か。ほ。き。を。に。む。り。り
は。家。次。り。ハ。神。社。あ。り。ぬ。も。い。ふ。ハ。名。何。も。さ。は。り。ぐ。あ。た。ふ
と。と。今。う。さ。う。形。り。ぬ。が。多。か。ハ。か。い。家。を。で。し。た。時。ふ。た。う。
ア。そ。る。ぬ。か。ぬ。り。き。ま。さ。じ。か。く。神。の。社。ふ。す。れ。は。陵。ふ。す。れ。

あまう。あま。い。何。し。は。し。を。う。ね。い。し。へ。の。と。申。あ。り。と。め
く。し。ぬ。ひ。も。神。今。の。言。あ。り。て。い。ま。づ。の。定。り。せ。し。ハ。大。く。さ。い。や
ま。か。う。ぬ。も。ふ。ち。む。有。ら。る。も。ゆ。を。い。く。も。ふ。も。ま。づ。け。は。あ。る
ま。所。を。い。ま。づ。め。ら。る。が。い。ふ。あ。た。た。書。が。と。も。考。へ。ら。る。の。と。お
て。ハ。知。が。い。ふ。う。ふ。さ。う。く。考。へ。ら。る。と。書。り。て。考。へ。定。り。ら。る。と
ハ。さ。あ。ふ。い。う。り。て。見。せ。け。ば。い。う。く。違。ふ。て。の。ま。き。物。じ。よ。を。形。が。い
ち。さ。さ。う。な。ら。ぬ。所。も。さ。あ。あ。ら。る。と。さ。さ。ふ。事。も。つ。へ。い。う。り。と
傳。へ。し。ま。が。い。ち。さ。き。て。い。も。あ。れ。を。み。づ。り。う。も。地。り。い。う。り。て。見
し。し。そ。れ。も。よ。う。く。さ。ら。る。人。う。さ。ひ。き。う。ね。も。せ。が。ハ。さ。う。さ。う
つ。せ。い。又。い。ま。づ。め。し。て。見。せ。ら。る。の。と。あ。り。も。程。う。か。う。つ。せ。い。ゆ。き

をんきばあしとていふもさあ物をもとさきこころにちつきりハ
松がくしとていふもさあ物をもとさきこころにちつきりハ
いふくちのし本とていふもさあ物をもとさきこころにちつきりハ
ゆりていふもさあ物をもとさきこころにちつきりハ
定りがさきこころにちつきりハ村の名に川浦破とていふもさあ物
はさるぬべし田とていふもさあ物をもとさきこころにちつきりハ
ぬべし寺はぬべし古きがのさきこころにちつきりハ
又さきこころにちつきりハ又さきこころにちつきりハ
物あかしくはのほろしとていふもさあ物をもとさきこころにちつきりハ
りいさるべしとていふもさあ物をもとさきこころにちつきりハ

べきふりくはさき何とハ申さるなりしとていふもさあ物をもとさき
て佛とていふもさあ物をもとさきこころにちつきりハ
ろきとていふもさあ物をもとさきこころにちつきりハ
きてさきこころにちつきりハ
もさきこころにちつきりハ
かてさきこころにちつきりハ
さきこころにちつきりハ
そこふりくはさき何とハ申さるなりしとていふもさあ物をもとさき
りいさるべしとていふもさあ物をもとさきこころにちつきりハ

もろくさうざとつらぬべくねき。

もろくさうざとつらぬべくねき。

和泉式部家系に人もたうもどねうん呼ぶて此をわたり

もろくさうざとつらぬべくねき。

うさくわりのきき星の編幅といふもひえそのまわり

もろくさうざとつらぬべくねき。

俵といふり

俵といふ字延喜式より見ゆれば美和十一年十一月二

日は太政官符ふもして類聚三代格ふ載り

入る朝日の礼

中原康富記ふ嘉吉二年七月一日参伏見殿又参三
條殿皆朝日之礼也といひ

祇園會々山拵

同記ふ同三年六月七日祇園祭礼也神幸并拵山

己下風流如例渡四條大路者也

天の下の政神事

職負令小神祇官汝の汝く汝官のくめふまげあきてそ

まがたふ太政官と奉らぬとて延喜式も同くまげ小神祇

式次より太政官式し後の号ねがふ北畠准后の職原抄も令

たうひうけいぞらぬとてまげくまげづらぬとてまげ

あがりまほしひまじしはまおき色かくまへいふまじり小神乃湯
 出れまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
 中へ入つまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
 無負令小軒所官別まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
 〇〇〇〇〇の下の起軒まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
 〇下麻葉まじりまじり四新大額昔也
 同信安同三年六月十日、麻園祭、麻園軒幸并轄山
 後、麻園會社山轄、まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
 新編、音勝田、文保中、まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
 中氣、麻園會社、義吉二年十月一日、参、外見、廻、又、参、三

